

第八十話

頼光誕生事

『前太平記』上 卷第十三 二五二頁から二五三頁より

天曆八年七月二十四日、左馬権頭源満仲が今年四十三歳にして、はじめて一子をお設けになる。母は、近江守源臣俊の娘である。ご夫婦のお喜びは、例えるようなもの

御喜び 譬ふるに物なし。

もない。ご親戚の公卿、諸従の大名は門前に（賑やかに）列をなし、祝いの言葉

門前に市を成し、 賀し申させ給ひける。

を申し上げなされた。祖父経基王は過ぎ去った頃から鎮守府将軍に任じられなされた

鎮守府将軍に補せられ給ひしが、

ていたが、今年で任期が終わり、奥州からの帰郷があり西八条にいらっしゃったと

今年任限充ちて

ころ、昨晚産気づきなされた頃からお使いが絶え間無く行ったり来たりしていた

夜前御産の気着かせ給ひしより、 御使櫛の齒を引くが如く往来しけるが、

が、「只今お産が穏やかに運び、男の子がお生まれになった」と申し上げたところ

ろ、急いでこのお館にお入りになって、お喜びの余り産着に纏っているその子を経

緋袴に押し纏ひたるを、

基が自らお膝にお乗せ申し上げ、人々に向かい仰ったことは、「私は六十歳にな

経基手づから御膝に据ゑ進らせ、

り、子供も多く持っていたが、孫という者が無かったから、この血脈が耐えるのだろうか、常にこのことばかり、心苦しく思ったが、ここ数年の望みが今日叶って、この喜びに直面すること、官位に上り、賞禄を預かった時も、(喜びは)これほどまでではなかった」と、たいそうお喜びになって、すぐにお名前を文殊丸と名付け申し上げられる。十一歳で元服があり、頼光と名乗りなされたのは、この若君のことである。さて、満仲は、子供がなかったため、ご末弟満茂と申し上げた者を、前々からご養子としなさり、今年まだ五歳でいらっしゃったが、今男子がご誕生になったので、そちらの方々のご相続のご養子の件をどのようにしようかと頭を悩ましたのだが、満仲が信頼を天下から失うことをお考えになったので、今回子供がお生まれになったが、(頼光を)次男と決めて、ご養子満茂を嫡男として大切にお育て

御猶子満茂を嫡男と冊き給ひける。

になったのだった。けれども、満茂は成長後も、非常に病気が多くて、享年はたったの二十四歳にしてお亡くなりになる。とりわけ、存命の間は、ずっと弓矢を袋に

殊に 存生の間は、天下統一して弓箭を袋にし、

入れ、少しも喧嘩も秩序を乱すこともなかったもので、自然とその武勇を見ることは

聊か鬨諍違乱の事も無かりいし故、

自づから其武勇を見ず。

できない。このことからして、満仲の養子であることを知られず、ただ頼光だけを嫡子とした。

『前太平記』を語る上で欠かす事のできぬ存在、源頼光公の誕生であり、私が『前太平記』を手に取り最初に訳した話です。とても思い出深く、当時は助動詞の訳し方をしっかり理解していなかった上『広辞苑』と『全訳古語辞典』のみで訳をしていたので、サイトを立ち上げに伴い、昔のノートに記した訳を見てあまりの誤訳の多さに笑ってしまいました。「御使櫛の齒を引くが如く」を「使いが齒を引くように来て」と訳していたのを見た時には頭が痛くなりました。今も決して上手な訳とは言えませんが、このころの訳を見ると少しは成長できたのかなとうれしくなります。

頼光公の誕生により喜ぶ経基王の様子が目に浮かび、とてもほほえましく感じます。江戸時代に成立した平安時代の文学ではありますが、新しい命の誕生はどの時代でも温かい言葉で語られることは素敵だと思います。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(__)m

公開：2015/5/23

改訂：2021/3

海熊童子